

はじめに

2024年4月、13年ぶりの会社員生活がスタートした。42歳の新入社員だ。

就いたのは日本語学校の専任講師。留学生に日本語を教えるのが主な業務だ。授業の他に学校行事の運営や教科書の採択、カリキュラム作成、学生の生活指導や進路指導、非常勤講師の先生のスケジュール管理などもあり、現場で動きながら、管理業務もする。

一般的に日本語学校の専任講師というと、薄給激務、やりがい搾取などと言われている。また、日本語業界自体5年以内で退職する人が多いそう。そんな働きやすいとは決して言えない業界に飛び込んだ私が、働くにあたって心に留めている言葉がある。それは「燃え尽きるまで働かない」というものだ。

というのも私は2011年からフリーランスで編集者とライターをしていたが、燃え尽きて2022年にやめてしまった。過去の自分の失敗を繰り返さないように、今はこの言葉を胸に刻みつけて働いている。

熱心に仕事に取り組んでいた人が急にやる気をなくして無気力になることを、「燃え尽き症候群」あるいは、「バーンアウト」という。好きな仕事嫌になるほど悲しいことはない。せつかく就いた仕事、できるなら長く続けられたほうがいい。

燃え尽きるまで働いてしまい、嫌になってしまうのには理由がある。どうして私は燃え尽きるまで働いてしまったのか。燃え尽きないで働くにはどうすればいいのか。自分の燃え尽き経験を通じて、私はそんなことを考えるようになった。

また、私は書くことや本を作ることを、趣味か仕事かでしか考えられなかった。仕事にできなくなったことで、自信がなくなり、自分には能力がないと落ち込んだり、ほかに売れている人を見て腐ったりした。しかし、そんなふう生きるのは苦しい。

世間には仕事中毒やそれによる燃え尽きで苦しんでいる人、仕事と制作や活動の両立で悩んでいる人が多い。これはそんな人に向けた、仕事と自分、活動や制作と仕事とのちょうどいい付き合い方を見つけるまでの話だ。

ちなみにこの本は『書くことについてのノート2』という位置づけだ。独立した本になっているが、もしまだ『書くことについてのノート』をご覧になっていない方がいるなら、合わせて読んでもらえるとうれしい。

それって趣味なの？(2023年8月21日「こけし日記」より改稿)

2023年の夏休みに部屋の模様替えをした。その際、部屋の一角をしめている、自主制作で刷った本の在庫の山を見た夫に、不思議そうな顔で「本を作るのって趣味なの？」と聞かれて答えられなかった。

こういうときによくある回答は、「本はお金じゃない。人生を通じた表現活動だ」だろうが、私は「お金にならなくても表現したいからいいんだ」と言えなかった。なんとなく、そう言うことを負けのように捉えていた。

夫のからかっているわけでも批判するわけでもない純粋に疑問というような口調で投げかけられた「それって趣味なの？」という問いに答えられないままいると、さらに「作家になりたいとか本作りしたいとか言うけど目的は何なの？」と聞かれた。字面だけ見ると詰問しているようだが、夫はただ不思議だから聞きたいという感じだ。私は「やりたいからやりたい」みたいなことしか言えなかった。

たしかに、夫の言うようにもう書くことを趣味として割り切ってしまうれば楽なのかもしれない。だけど、私はそれがどうしても嫌だった。

山崎明子の『「ものづくり」のジェンダー格差』を読んだときに出てきた「フェミニイズ」という言葉にドキッとした。「フェミニイズ」というのは、社会のあらゆるものはジェンダー化つまり、男性的なものと女性的なものに分けられており、その女性化されたものを指す言葉だ。著者によると、手芸やものづくりといった創造的な活動は「フェミニイズ」されているため、技術が必要だったり時間のかかる仕事でも主婦として家庭の中で繕い物をするようなただ働きになったり、内職のような低賃金労働に従事させられたり、定職になりにくいため断片的な時間や時限的な期間で働かされたりするという。

「女のやること」とか、「主婦の余技」というような言い方で、手芸が実際の仕事よりも低く見積もられるのがそれだ。また、それが例え仕事になっても、その現場は「やりがい」や「楽しさ」という言葉で満ちており、報酬が抑えられるとも指摘されている。

たとえば、SNSと販売サイトにより、自分の作ったものを自分で売れるようになり、「作家さん」と呼ばれることでハンドメイドがブームになっているが、実際それで生活できている人は少ない。みんな作家だが、稼げる作家は一握り。その一握りになれない人は「好き」「やりがい」が報酬になる。

これはまさに、今のライターブームや自主制作本ブームと酷似している。今は出版社に入ったり、賞に応募しなくてもいきなりネットで文章が発表できるようになった。課金でお金が稼げるようになり、自主制作本が安価に作れ、それを売るイベントや書店が増えた。しかし、その報酬は微々たるものだ。その代わりにSNSを通じた承認、イベントや書店で「作家さん」「ライターさん」と呼ばれることが報酬となって、今のライターブームや自主制作本ブームを支えている。

多くの書く人が求めているのは、得意なこと好きなことを書いて課金や作家やライターで専業で食べていくことだろうが、そんなことが可能なのは一握りの人だ。

『クリエイティブであれ』では、社会が従来のような工業主体の産業からソフトウェアやサービス業が産業の中心となり、その中でクリエイティブ産業も発展してきたことで、大学や専門学校などの教育機関ができ、志望者も増えた。ところが、増えた志望者を吸収するだけの働く場は少なく、期間限定な仕事も多いと指摘されていた。

さらに、クリエイティブ産業は工場労働のような時間が決まっていてその時間だけ働けばいいというものではなく、不規則で24時間いつでも対応しなければならないような働き方が主流となる。その上、感情や容姿、人格も動員しなければならない。さらにそれを、上からの押し付けでなく、「好き」「夢」「得意」といった言葉で、自分が主体的に選びとり、自らその中に参入するような形で動員させられる。自分の欲望でクリエイティブ産業に参加しているように感じるため、労働現場に参入できないこと、労働現場の問題も自分の才能やうまくやるセンスがないせいに矮小化されてしまうとあった。

また、うまくいった人の「好きなことをやってきただけ」「得意を生かして」「楽しかったから」といった言葉が流通しているため、そのような大きな構造に気づくことはなく、このような指摘は才能のないやつのはがみや言い訳として切り捨てられてしまう。

ものを作るということが生活の一部であった時代では、単に作って使えばよかった。しかし、資本主義が生まれて生活必需品を買うようになり、消費社会が進むと商品が差異化していき、何を持っているかがどんな人かを表す手段となった。やがてクリエイティブなことも産業化された社会では、そこで働くための教育システムが作られ、社会ではものを作ると

いうことが、限られた特別な人にしかできない遠い行為のようになっていく。今はインターネットやパソコンのお陰で作るハードルは下がったものの、それを仕事にするのは難しいはまだ。

人がつくった作品や文章にはパワーがあって、作品やものを作る姿を見ることで癒されたり、勇気づけられたりする。ところが、それを「仕事」とか「趣味」とか分けて言ったとたんに、「うち(仕事)に差しさわりのない範囲で」と活動範囲を押し込められ、「趣味の範囲なら好きにやれば」といったふうに、「仕事じゃない」ことが軽んじていい理由にされ、そのパワーが削り取られるような気がする。

売れるかどうか、商品になるかどうかよりも前に、何かの切実さがあって、人はものを作る。だけど、社会には仕事にする以外でこの切実さを発揮できる場がない。それに対して『ものづくり』のジェンダー格差』ではこのように書かれている。

グローバル化した現在の産業構造では、誰もが人の創造力を想う力や機会を奪われている。言説はそこにも加担している。(略)視覚表象も言説も、本当は私たちにイマジネーションを与え、ものづくりを意味あるものと理解させ、人の創造の力をむやみに搾取することを回避するために機能させることもできるはずだ。(279～280ページ)

ここで思い出したのが、山崎ナオコーラの『鞠子はすてきな役立たず』(『趣味で腹いっぱい』を改題)の主人公の鞠子だ。鞠子は「女性活躍」のご時世に、大学院で文学を専攻したあと、「主婦になりたい」と堂々と言って、園芸やさんぽ、文学などの趣味に邁進している。一方の夫の小太郎は、高卒の銀行員で、「働かざるもの、食うべからず」がモットーの父親のもと、働くことが当たり前の環境で育つ。鞠子のやっている趣味は世間の役にも、鞠子のキャリアにも役に立たないことばかりだが、小太郎は鞠子と結婚したことで、生活に大きな変化が訪れる。

鞠子の趣味に向き合う態度は、作る過程を楽しむ、できたものを愛でる、人に見てもらって感想をもらう、他人と比べて評価をしないなどだ。これは好きなこと、得意なことで儲けるとか仕事にするといった態度とはかけはなれている。鞠子の「趣味で何が悪いの?」と開き直っているようなこの感じを身につけられたら。

それって趣味なの? を仕事にできないことの揶揄や嘲りと受け取らず、いっそ堂々と趣味だと開き直って見てただ続けてみたら。そうすればいつか私も自分にとってのものづくりの価値を取り戻せるだろうか。

あとがき

結局私の燃え尽きの原因はなんだったのだろう。

それは一言でいうと高すぎる理想と現実のギャップに耐えられなくなったことだと思う。また、出版業界をリベラルで進歩的で自由で人格的にも立派な人が集まった理想の業界だと思い、祀り上げ、そこで働く自分もそうなったように思いこんでいた。そんな人にかこまれて理想的な仕事ができる自分は特別だと思いこんでいた。自分の能力を高く見積もって、届かない高い目標を掲げて、できない自分をダメだと責めていた。そして業界にも同業者にも自分にも失望した。

おそらくそうになったのは20代からずっと景気が悪くて、非正規雇用が増えたせいで労働環境も悪くなっていった報酬が希望できないならせめてやりがいや仕事内容に期待したい、そしてせつかく貴重な時間を使って働くなら、自分の好きなことや理想をかなえられるようなところで働きたいという思いがあったからだろう。

そういう時代においては「生き残り」や「能力主義」が叫ばれ、いい加減や弱さは許されず、「強くてできる人」でないといけないという圧も強かった。フリーランスでは特にそうだ。だからよけいに自分が生き残ろうとして、「能力が高い人」とか「できる人」とか「特別な人」にならなければという意識が強くなったように思う。

しかし、正直職場で求められる「できる／できない」なんて、職場と職種と一緒に働く人によって違う。それに、「できる／できない」は一かゼロかという二分法ではなくてグラデーションになっているはずだし、営業は得意だけど事務は苦手といったように、でこぼこになっているはずだ。それを単純化して、「お前はできる側」、「お前はできない側」と評価されて、それを受け入れないといけないなんてばからしい。

また私の場合、能力主義は人にも向かった。出版業界に失望したということは、私が業界や同業者をジャッジしていたから起こったことだ。多少の理想は必要だが、それを高くせず、がっかりすることがあってもまあそんなものかと思い、なあなあにやっていたら、もう少し働きやすかっただろう。自分だけじゃなく、世の中の雰囲気もそうならないと、なかなかそう思えない。

今はこれを書いて経験を整理できたおかげで、恨みがましい気持ちはだいぶマシになり、自分が特別だと思いたい気持ちも減った。これからは高邁な理想を掲げずに普通に働こうと思う。

最後に、日本語教育業界も過渡期で、制度が変わりつつある。あと何年続けられるかわからないが、せつかく就いた仕事なのだから、無理をしすぎずにできるだけ長く続けていきたい。